

金剛八宝（剣）

I ダイヤモンド・エイト・カット考

新体道が生まれてから今年で50年が経った。今や新体道は、50年物のモルトウィスキーのように、私たちの身体表現や生活様式を通して熟成され、内容が豊かになっている。道友・マイケル・トンプソンは随筆の中で、「新体道は、稽古の最初と最後に、生徒が先生に対して一列に正座して挨拶をする代わりに、先生と生徒が輪を描いて座って挨拶ことによって、日本の武道に新しい伝統を持ち込んだ」と述べている。青木先生によるこの改革は、先生と生徒、および生徒どうしの関係を劇的に変化させ、武道に新しい地平を斬り拓いたと言えよう。

昨年フランスで開催された第11回新体道国際大会で、皆川正・道守が発表したDiamond Eight Cut《金剛八宝（剣）：仮称》も、半世紀にわたる新体道の熟成の成果と見ることができ、これもまた新体道に新たな地平を斬り拓く、画期的な創案と言える。2016年11月、パリで行われた研修会に参加した、米国新体道のシン青木・正師範は、「金剛八宝は結晶である」と述懐している。彼にとっては、「皆川道守の50年にわたる新体道研鑽の成果が、金剛八宝の型として結晶化した」と見たのだろう。

私は、金剛八宝には次のような側面があると思う。

- 1) 金剛八宝は天真五相と栄光を統合した、気品があり、威厳に満ちた型で、それは誰にも開かれている。しかもその型によって、誰でも「斬り下し組手」の成果を享受することができる。斬り下し組手は天真五相と栄光を統合した、奥深く、内容が豊かな型だが、大多数の人たちには難し過ぎ、特に高齢者には演じられない型であった。しかし驚くべきことに、金剛八宝は体の弱い人たちにも演じることができ、覚え易く、稽古し易い特長がある。
- 2) 金剛八宝は賛美、浄化、イニシエーション（通過プロセス）の型として行うことができる。神道は浄化儀礼を取り込んでいるが、新体道も数多くの斬り技 — お祓いの型 — を組み込んでいる。私はかつて、「エイッ、ヤーッ、トーッ！！」の気合と共に統一基本技を演じて、新築した家の清めや、死者のエネルギーの浄化、または死にゆく人を送り出す儀式等を執り行ったことがある。また、時には金剛合掌位で、般若心経を唱えることも

あった。しかし、金剛八宝はそれら全てを包含しているので、大声を出したり、詠唱したりする必要はない。しかも武道的要素が無いので、闘争的要素が無く、平安に満ちている。

- 3) 金剛八宝は殆ど、あるいは全くウォーミングアップを必要とせず、直ぐに演じることができる。号令者は下半身のストレッチ、または簡単な屈伸運動の後、金剛八宝から本稽古に入ることができ、それ以外の導入運動は一切不要である。また、金剛八宝はパイプ椅子に座ってもできるし、立ったまま素手で行うこともできる。
- 4) 金剛八宝は効果的な治療手段としても使える。霊気や按摩では患者の上に手を置き、目視と瞑想によって治療を進めるが、金剛八宝では、その型の動きをイメージしながら治療する。
私事になるが、義母が関節リュウマチによる酷い痛みで苦しんでいた。その痛みのために按摩を施術できないので、私は彼女の一方の手の指を自分の両手で包み、座ったまま背筋、首筋を軽く伸ばし、目を閉じ、全く動くことなく、金剛八宝の動きをイメージし続けた。患部／彼女のからだの一部を小宇宙と仮定して、その小宇宙の中で夜空を斬り開く様子をイメージした。彼女の手を自分の手で包んでいる間、私の気と意識は、ちょうど鍼治療の針か、手術用のレーザーナイフのようになって、その小宇宙を飛び回っていった。このような手当てをする時に、私はかつて、遠当てをイメージしながら患部に自分の「氣」を送り込む事に集中していたが、今や「斬ること」と「開くこと」だけをイメージしていた。すると、義母は突然「あぁ～ッ、私の中で何かが動き始めた」と言うのであった。
- 5) 金剛八宝は「光と戯れる（以下光とだけいう）」をリードする鍵となる。「光」で、ついてゆく人はリードする人の手首を持って、リードする人の意図を感じ取ってゆく。そのうちに、次第に手首のつかみ方がルーズになり、最後には手首を離してしまう。かつて私は「光」でリードする立場になった時、手を上下、左右に動かしていた。しかし今では、手や手首を全く動かす必要がなく、自分の腹／心の中で金剛八宝をするだけで、素晴らしい「光」の組手ができるようになった。「光」でリードする時、相手の長所を伸ばし、且つ、傷つけたりしないように、「前入り身」を使わずに、「下がり入り身」を使った方が良いということは以前から解っていたが、これは金剛八宝を使った組手をちょっと（一瞬でも）でもやって見れば、容易に理解できる。（前入り身でやると強すぎるのである！）

- 6) 統一基本技の話になるが、天相から証光（大上段の斬り込みも斬り払いも）剣先が描く奇跡は 90 度、中段斬り払いの奇跡は約 180 度、という固定観念で普通は稽古している。

金剛八宝で、中段斬り払いをゆっくりと大きくやると、斜め後まで斬り開くことになって来て、次第に 180 度の動きが約 270 度前後の動きになってくる。さらに金剛八宝の七～八番目の動作で、目の前の空間を斜め下に斬り払った後、そのまま大地を斬り払い、剣先を自分自身の真後ろから振り上げて来ると、大上段も「斬り払い下ろし」とでもいう動きになって、天と地を一気に斬り払う 360 度を超えた動きが出て来る。この動作を「現世そのものである大宇宙」を斬り払っていると仮定した時、禪（無門関）の『百尺竿頭に須く歩を進め、十方世界に全身を現すべし』という考案が、ストーンと腑に落ちた。

- 7) 自由に動きながらこれをやると、金剛八宝は超大気舞 — 天と地を舞台にした壮大な舞踏 — となる。金剛八宝を使った大気舞を稽古した後、私は今まで経験したことのない深い瞑想を体験した。パイプ椅子に腰掛けてから、金剛八宝を数回繰り返して最後に金剛位（印）を解きながら両掌を（手の平を上にもむけて）両腿の上においた途端、意識を外へ外へと向けていた反動で、一気にミクロの世界で落下して行った。これまでやっていた瞑想では、暗闇の世界に落ちて行くのが怖くて、ある程度まで進んでいった後で、いつも引き返していた。しかし金剛八宝と一緒に、何処までも沈んで行けるので、今や瞑想でのトリップが毎日の極上の楽しみになっている。

II アオキ・ワールドと私

1 ホトケの掌

中国の高僧・三蔵法師は、般若心経の経典を持ち帰るためにインドに旅立ち、その旅の途中で、数多くの魔物に出くわした。そこで彼を護るために三匹の神獣が遣わされた。その一つが超能力を持つ猿の神獣で、孫悟空と言った。彼は自分を過大評価していたので、三蔵法師は「お前の超能力を見せてごらん」、と命じた。そこで孫悟空は筋斗雲に乗って、世界の端まで飛んで行って、雲の間に聳える五本の大きな柱を見つけた。彼は有頂天になって、そこまで飛んできた証拠として、その柱に小便をかけてサインした。やがて宇宙の真の姿 — それは御仏の身体であった — が三蔵法師と孫悟空に示された。二人は御仏の途方もなく大きな掌に立ち、遥か遠く、測り知れない距離

にある御仏の指の一本を見つけた。しかし、そこには孫悟空が巨大な柱と勘違いして、小便でサインした跡がくっきりと残っていた。

この寓話は、私たちがどんなに賢く、どんなに能力があっても、宇宙のスケールは想像以上に大きく、私たちのやること為すことの全ては、御仏の手の内にあるという事を示唆している。

これはまた、アオキ・アートとしての新体道と私の関係を象徴しているように思う。自分が孫悟空で、青木先生の世界が御仏の掌であるかのよう
に・・・・・・・・

金剛八宝で夜空を斬り拓き、その裂け目を見て、「大宇宙の外に出た」と感じ、『遂に限界を超えた』と思った。しかし実は、「大宇宙の外に出る」という事を最初に話してくれた人が青木先生だったことを思い、愕然とするのだった。

2 内なる宇宙と外に広がる宇宙

金剛八宝をじっくりやった後で、天真五相をやってみる。天真五相の最終部「オ」で、両手を思いっきり後ろに伸ばし、それから宇宙のかなたに広がってゆく。両手に母なる大地・地球を丸ごと掬い上げ、大宇宙に向かって送り出した後で、あらためて大宇宙を小宇宙の中心・丹田に呼び込みながら、「ウ〜ム」で天真五相を完結する。これが「内なる宇宙」と「外に広がる宇宙」が出会い、合体する「丹田宇宙」だ。

体の中心から放たれた光が、あらゆる方向に広がり、宇宙に満ち満ちて、やがて丹田に還ってくる有様をイメージする。大宇宙を突き抜けて駆け巡る外へ向かう金剛八宝と、自分の中心から、体内を駆け巡る金剛八宝を思う時、密教の「金剛界曼荼羅」と「胎蔵界曼荼羅」で示されている世界も斯く在りなん（?!?!?!）と想像の羽を広げるのである。

3 オチは「山頭火」

戦後の歌人に、江戸時代の芭蕉に似て生涯を旅で過ごした、さすらいの歌人として有名な種田山頭火がいる。彼は旅先でいろいろな俳句を作ったが、その中に「分け入っても、分け入っても、青い山」という句がある。下生の藪を何回も何回も押し分け掻き分け、ひたすらに前進し、やっと頂上に辿り着いたと思ったら、目の前にはまだ青い山が聳えていた。

私事になるが、2000年の始め頃から青木先生と私の関係はそれまでのようなダイナミックなものではなくなってきた。80～90年代はお互いがお互いの中心にむかって進みながら益々意気投合してゆくような関係であった。しかし2000年代に入ってから、お互いに距離を置いた方がお互いを理解出来るような関係になったように思う。その為に、好むと好まざるに拘わらず、ワタシ自身の稽古の世界は、言わば「ポスト・アオキ時代」に入っていた。だからこれまでの17年間、私は下敷を掻き分け、掻き分け進んできて、色々な意味で、新しい地平を目指して歩みを続けてきた。しかし皮肉にも、私は節目、節目にいつも「青木ワールド」の象徴である、「青い山」を見る破目になった。

考案としての大基本（栄光と天真五相）の理解が進み、その世界が広がって行けばゆくほど、アオキ・ワールドは大きくなって行った！結果的に、私は出発点から抜け出した積りだったが、気が付くと何時の間にかそこに還っている自分を見出し、青木先生の世界それ自体が大宇宙なのだと知らされた。この自由と回帰の逆説的な立場を繰り返して、私は青木先生の芸術家号、「天外」の深い意味にしみじみと思いを馳せる昨今である。

2017年5月、75歳の誕生日
パリ郊外・ロワールの自宅にて

伊東 不学

(この随筆は、アメリカ新体道の会報「ボディ・ダイアログ」の2017年春季号に寄稿した小論文を、我が心友／帆刈和夫氏の協力を得て、日本語版に改訂・編纂したものです。)

参 考

ダイヤモンド・エイト・カット Diamond Eight Cut (DEC)

(創案：皆川正)

始め方：

- ・ 素手による場合： 帰一位～放光位～照世位～天頂位～金剛位
- ・ 剣を持った場合： 抜刀～照世位～天頂位～金剛位（剣を顔前に下ろし
つつ金剛剣）

全動作：

- 1、証光／正中剣
- 2、中段斬り払い（左～右）
- 3、斬り上げ（右下段～左上段）
- 4、斬り払い（左上段～右下段）
- 5、中段斬り払い（右～左）
- 6、斬り上げ（左下段～右上段）
- 7、斬り払い（右上段～左下段）
- 8、大上段斬り払い～証光

終わり方：

- ・ 素手による場合： 金剛位～(献花位～放光位)～帰一位
- ・ 剣を持った場合： 金剛位（剣を顔前に引き戻して金剛剣）～双手下段払
い～納刀

注： 引き続き DEC の反対側をやる場合、大上段斬り払いから金剛位あるいは
金剛剣に入ってから第一番の証光／正中剣に戻り、第二番から第八番ま
でを左右対称で行う。